

私の喜びと感動

愛知県・元UIゼンセン同盟静岡県支部長・照井 光文

1、労働運動のきっかけと当時について

○ 日本の経済成長が著しくなる、昭和35年4月秋田県横手工業高校紡織科卒業した私は「社長にはなれないだろうが将来工場長にはなる」との夢を持って、愛知県蒲郡市のF織物会社に入社。中卒初任給日給200円、高卒220円で、仕事が終わる腹の足しにした中華そば（ラーメン）が一杯40円でした。

当時、全織同盟（現・UIゼンセン同盟）の「集団組織化」が繊維の中小企業を目標に山口正義組織部長（あだ名ライオン）・山田精吾中央オルグ（書記長・副会長を歴任後、連合初代事務局長）を中心にして三河地域で進められておりました。同年4月8日午前10時同時刻、7社の会社に、一斉に労働組合が結成されました。

後で先輩からの話として、昭和34年9月伊勢湾台風襲来で愛知・三重・静岡県周辺は大きな被害を受けて会社・個人共に災害復興にかなり難儀をした様子。

組合作りのオルグは徒歩の毎日で、靴を何足もすり潰したというから先輩たちの大変な苦勞が偲ばれます。（自転車もあまり多くなかった頃です）

組合結成時から、なぜか私は組合役員となり、山田先輩はじめ朝見清道愛知県支部長や遠州浜松地域で集団組織化を手がけ交流を深めた佐藤文男先輩たちには、公私にわたってご指導を頂き今日があると感謝いたしております。

○ 昭和37年12月には、野付中央オルグ等の手によって三河地域の第2次集団組織化が進み「三河織物労連」2,300名（特徴は同業種・同地域での合同労組）が誕生しました。この時から照井は労組専従者となりましたが、身分は全織同盟職員で休職して三河労連出向扱いの形態でした。（全織同盟初の休職・出向で児島労連の森岡正太郎氏・知多労連小林昇氏と照井の3人）翌年4月には、山本和市労連会長を蒲郡市議会議員に擁立し、誕生させました。この選挙の力が地域への影響力と繊維労働者として、大きな発言力を得ることができました。

一方、左翼的労働運動と新興宗教の活動が跋扈しておりました。

○ 全国的に展開された「集団組織化」によって昭和38年には、全国25産地25,000人余の「綿スフ織物中央集団交渉」が綿工連（経営者団体）との間で実現しました。その成果は繊維産業のみならず当時、日本の賃金水準・中卒初任給決定の物差しであり、全産業の求人に大きな影響がありました。交渉の場に参加できたことは、私の大きな勉強でした。

（妥結内容は、①新中卒15歳初任給10,000円 ②賃上げ額は一律1500円を増額③給与体系の是正原資（500円を基準）は産地ごとに協議する。④実施時期については、一律分は昭和38年6月度、是正分は7月度 ⑤食費徴収額は月額270円増額。）

2、体験と思い出

(1) 賃上げ交渉

三河織物労連の専従者になり、しばらくした昭和41年7月全織同盟本部研修となり、組織局に配属されました。この頃賃上げは、6月要求・夏から秋にかけての労使交渉でした。夏のある日、賃上げ交渉で中央労働委員会の斡旋が不調なら翌朝からストライキ突入。緊迫した斡旋の成り行きを全織本部で役職員全員が待機することとなりました。

当時の中央労働委員会は、木造つくりで廊下を歩くとギシギシ音の出るうるさい驚張り？が印象深い。さて深夜になってようやく綿紡・化繊、続いて羊毛関係が妥結した。麻部会の関係組合は未だ決まらず・・・朝方になってようやく解決。

滝田実会長曰く「麻部会は、とうとう朝^{あさ}になったが・・・ご苦労様でした」と。会長のジョークに私たちは苦笑をこらえていました。滝田会長は交渉で苦労した仲間と、時間切れでストライキに入る寸前で緊張しながら待機した職場の組合員や多くの仲間に対する心からのお礼であったろうと思い出します。トップリーダーは、常に冷静に状況を判断して、時には笑いを、時には励まし・厳しく指導、仲間を信頼することの大切さを本部で教わりました。

(2) ゲタにもいろいろあります？

労働組合が出来る以前、社長から従業員一人ひとりに「賞与」と書いた紙袋をお盆の2、3日前に0、5か月分程度いただく風習があった。賞与は、あくまで社長の判断（独断）で多い・少ないは、いかにゴマを挿るかで決まる、とさえ言われた。また当時、従業員は自分を含めて遠く東北・九州・山陰地方から愛知県に働きに出ていました。楽しいお盆に、里帰りする際お金を沢山持ち帰ると、評判が上がり求人もしやすいと会社は考えていました。

また、少ないボーナスを早く支給すると直ぐ使ってしまうと会社は考えていました。そのため賞与は、お盆の直前に支給したと後日談。昭和36年夏期一時金交渉の出来事である。三河蒲郡地区7社・7組合の初めての集団団体交渉が行われました。

交渉の進め方は、山田中央オルグが労使双方に手助けしながらの交渉。当時、繊維大手会社で1、5ヶ月程度でしたので、三河の100人規模の織物会社で0、5ヶ月程度からいっきに1か月台に乗せるかどうかは労使とも大変なことでした。

交渉はせめぎあいとなり、まとめる段階で山田さんが「会社の案に、一律ゲタをはかせてほしい」と提案。これに対して会社側のS労務委員長「ゲタといっても、桐下駄のように高いものもあるので困ります。それも全員に下駄を履かせることなど無理です」と。ゲタとは、誰でも知っているように「一律」ということであるが、当時は退職金代わりにタンス・布団・ミシンなどの花嫁道具を支給しておりました。経営者は、賞与を今までの2倍以上支払いさらに下駄まで買わされると思ったでしょう。後々、山田先輩が当時を懐かしんでいたことを思い出します。(昭和30年代の退職金規定は男子・女子の区分はないが、定年・死亡退職、結婚・出産、自己都合退職の3区分されておりました。)

（３）埼玉県H繊維染色の組織化

昭和41年夏、全織同盟本部研修中のことであります。埼玉県浦和市にあるH繊維（染色会社）に対して組合作りを働きかけておりました。H繊維の社長は地元名士で、政治的にも大きな力を持ち、日経連のモデル工場として同業他社ではない変則3交代を行い、深夜も稼働していました。私も組合づくりを手伝うことになり、目蒲線の洗足駅近くの全織同盟「洗足寮」から浦和に通いました。はじめの中は、宣伝カー（戦車に似た大型車）運転の内海先輩と2人で従業員に対して、呼びかけとビラ配りが日課でした。

埼玉県支部は木造アパートの狭い部屋で、倉島支部長・新井常任・女性書記の3人。しばらくして一連の活動に呼応して、数名が埼玉県支部に相談に来ました。打ち合せ方法は、極秘に「かめの子会」と名づけて近くの公民館会議室を借り、労働条件（待遇・不満・他社との比較など）、労組についての勉強、会員の拡大など閉館時間で職員から帰るように言われても熱心な勉強会が続けました。

また、会社従業員に我が高校の後輩がいることが分かり、事情を説明し彼から会社情報と協力を得て大きな成果を挙げることができました。

「かめの子会」の会員は徐々に増えたが、一方で組合づくりが会社には知れると怖いと離れる者もありましたが、深追いをせず当分の間内緒にしてもらい、後日一緒にやろうと約束して外しました。秋になり、一段と会員が増加するのに合わせて会社前の田んぼにテントを張り、「H繊維民主化闘争本部」の看板をかかげて運動が本格化。賛同者が多くなるに従い、オルグ団も本部・加盟組合の応援者が増加。解決のためS労務担当常務に面談申し入れを繰り返したが拒否にあい、そこで私たちは、彼の車が来たら話をしようと構えてい。

ある日、車で出て来るS常務と話をしようと立ち塞がりスクラムで阻んだところ、車は一旦私たちの前で止まり、バックしてまた前進を繰り返しました。3回目に車はスクラムに突進してきたが自分はなぜか逃げませんでした。現地責任者の坪西中央オルグの声「だれかケガ人はいないかー」一瞬してから足が痛い。倒れている私を見て「救急車を呼べ」の声。照井は車にはねられて救急車で病院へ搬送され、入院することになりました。警察が来るやら、マスコミが来るなどテンヤワンヤの騒ぎ。ケガは、絶対安静・完全看護でしたが幸い検査の結果、右足打撲傷3日で退院。ケガもなんのその勇氣100倍、グルグル巻きした足の包帯を見せながら、松葉杖姿でマイクを持って「会社は組合作りを妨害するな」「労働組合は憲法で守られておる」「従業員は立ち上がろう」と呼びかけを強めました。

この事件を契機に、全織同盟の赤旗・加盟組合旗、立て看板が会社の周りを取り囲み、「会社は、謝罪しろ」「労組を認めよ」「不当労働行為やめろ」と社内に向けた宣伝カーによる呼びかけ、守衛所前にはオルグ団の座り込みなど激しい運動展開となった、一方、町中宣伝カーによる事実と窮状の訴え、軽飛行機で町中にビラを撒く計画もありました。堪りかねた会社側はついに観念、全面的に非を認めて昭和41年11月に全織同盟加盟組合が誕生しました。

この闘争がきっかけとなり、関東地域の染色の組織化が前進したと聞く。そして組織強固な「染色共闘会議」が出来上がるのです。

○ H会社と全織同盟との協議当日、休戦状態となったオルグ団は手が空いたので他社のオルグ

を行うことになり、地事情の分からない自分は、加盟組合支援者の道案内で浦和市内のN会社に単身飛び込みを行った。通常は、会社の近くで待機して出てくる社員に対するオルグが一般的である。東北訛りの自分は「御社前で女子の募集書きを見ましたが、自分の妹を雇っていただけませんか？」とウソと度胸で訪問したら、運がよく直接勤労課長と面談が出来ました。課長は、喜び勇んで会社案内・求人案内書・労働条件をこと細かく説明し、更に工場案内までしてくれました。

不思議と自分の妹を本当に入社させる気分となり、色々課長に質問した後堂々と帰りました。調査結果を県支部長に資料と情報をしっかりと報告、びっくりされたことがとても懐かしい。まもなくこの会社に労働組合が結成されたと聞き、少しは役に立ったと思うと新たな闘志が湧いてきました。

（４）運動のかべ・その例

○ 労働運動一筋と格好いいようなことと裏腹に、かべもありました。民社党結党時から「福祉国家」建設の議論がありました。イギリスや北欧諸国の「ゆりかごから墓場まで」安心出来る福祉をと、当時どこでも話が出て、政治・労働界・出版物と多岐にわたっておりました。

ある日、福祉の話におよんだ際「他国で見たのか？ 所詮本とか・人の話ではないのか？」と自問自答、以後この種の話が出来なくなりました。私の人生で大きな壁でした。そこで奮起一番、蒲郡から名古屋・県支部へ通勤２時間の帰り道、職場には内緒で英語塾に３年ほど通い・旅費小遣いをためて、３１歳の１９７３年夏妻・子供２人を残して、念願のイギリスへ単身自費の短期留学が実現。夢に見たロンドン、片言ながらの会話・バスの小旅行・防空壕を備えた地下鉄各駅、夜はパブへ、見聞は自分なりに大きな成果を得ました。これが無ければ途中で退職しただろうし、スイスの友人ができて翌年彼の来日も大変うれしい事でした。

留学後、労働講座などは自信にあふれ、仕事に張り合いがあり、現役を退いた現在も血肉となっています。

○ 昭和４８年西三河事務所長時代、愛知県岡崎市の紡毛紡績１４社の組織化が一段落して、労連事務局長を兼務の頃、ある社長から「全織同盟の給料より２倍出すから、当社で働かないか？」と誘いを受けたが、即刻拒否。理由は、労働運動が自分の天職であり、仲間と一緒に働く喜びでしたから。（当時、流通・レストラン・専門店などに仲間が数名スカウトされた）

２５歳で結婚する時もスカウト話がありました。これは逆に大手綿紡績N社M工場のK勤労課長から「嫁さんを連れていかないで、君が当社に來い」でした。後日、ゼンセン同盟５０周年記念祝賀会の折、T社の社長となったK氏と面談が出来当時の事を懐かしく話したことがありました。

（５）先輩の励まし

その１、西奥羽支部（１９８０年４１番目の県支部として設立、山形・秋田を管轄）、に着任後、直ちに福島県に近い米沢市から青森県に近い大館市まで約３６０余キロメートルの道を駆け巡ってのオルグの毎日。一人支部長でバテそうな折、佐藤副書記長から「東北の組織化１００人は、東京・大阪の１，０００人に勝るよ。頑張れ！」と勇気づけられました。

併せて、船野全国オルグ・三ッ木全国オルグ・大出全国オルグなどの応援と加盟組合の支援もありました。冬道では雪中行軍的オルグもあり、みんなの力と家族の協力（事務所が留守の時、自宅が連絡先）で組織が約3倍になり、1988年10月念願の山形・秋田県支部が分離独立誕生しました。

（1980年までは、東北地方全域を藤間支部長と河野常任が担当しておりましたが、分離独立によって北東北（河野一郎）・西奥羽（照井光文）・宮城（網代真也）・福島県支部（藤間雄一）としてスターとしました。）

その2、 「今年もゼンセン大会が近い、隠し財産は無いかね？」と朝見愛知県支部長。

「未だ、途中ですが・・・」と照井。翌日支部長は組織化のため自ら出向いて、ツメをして組織化実現を果たされました。見事さと感謝の思いがいっぱい、実力を見た思いでした。その折「先ず仏を作ること。後から魂を入れたらよい」との指導。「調査なきところに、要求はなし」「メーデー・福祉活動は考えが違っても一緒にやろう」他たくさんの事を学びました。

（6）私の好きな言葉

その1、「信念」

夢なき者に理想はなし 理想なき者に信念はなし
信念なき者に計画はなし 計画なき者に実行はなし
実行なき者に成果はなし 成果なき者に反省はなし
反省なき者に前進はなし これすなわち信念という

その2、 ・「労務管理は温かく、労使関係は涼しく」

・「誰かが、どこかで見ておるよ。がんばれ！」

・同じことでも考え方の例として（基準の捕らえ方）

「東京100なら、地方は80でよい」ではなく、

「地方を100として、東京を120に」

その3、 「皆さんは、組合役員です。〇〇会社選ばれて入社致しました。選ばれた会社の仲間から組合員の代表として選出された以上、自信と誇りを持ってみんなの為に頑張って下さい」「皆のために尽くした優秀な組合役員が、将来会社幹部になれるのです。民間会社はこの繰り返し、安定と発展に繋がるのです」と励ました。

平成19年12月記

以 上